

自由投稿論文

バンドマンのフリーター選択・維持プロセスにおける積極性と合理性 —若者文化の内部構造に着目して—

The Activeness and Rationality in the Process of “Freeter” Selection and Continuation by the Rock-musicians Chasing Dreams: Focusing on the Internal Structure of Youth Culture

野村 駿（名古屋大学大学院）

【要約】

本稿の目的は、「音楽で成功する」といった夢を掲げ、その実現に向けて活動するロック系バンドのミュージシャン（以下、バンドマン）を事例に、夢を追う若者がフリーターを積極的に選択・維持するプロセスとその背景を、若者文化の側面に着目して明らかにすることである。

若者の学校から職業への移行を扱ったこれまでの研究が、フリーターを積極的に選択・維持する若者の移行過程を看過してきたという問題意識から、バンドマンを対象とした聞き取り調査のデータを分析し、次の3つの知見を導出した。第1に、バンドマンはバンド活動を「やりたいこと」と見なしながら、それと同時にバンドメンバー同士の相互作用の中でフリーターを選択していた。第2に、バンドマンはライブ出演に向けてメンバー間で場所と時間を共有する必要があることからフリーターを選択・維持していた。第3に、フリーターであることによって生起する金銭的困難が、バンドという活動形態の集団性とバンド単位で支払いを求める音楽業界の料金システムによって緩和されていた。

以上の知見を踏まえ、バンドという活動形態の集団性と音楽業界の料金システムが若者文化の内部構造として存在するために、それに適応しなければ夢が追えないバンドマンは合理的な進路としてフリーターを積極的に選択・維持していると結論付けた。

キーワード：バンドマン、フリーター選択・維持プロセス、若者文化の内部構造

1 はじめに

本稿の目的は、「音楽で成功する」といった夢を掲げ、その実現に向けて活動するロック系バンドのミュージシャン（以下、バンドマン）を事例に、夢を追う若者がフリーターを積極的に選択・維持するプロセスとその背景を、若者文化の側面に着目して明らかにすることである。

若者の学校から職業への移行（以下、移行）の不安定化・困難化は多くの国々で社会問題化され、政治的解決が急務とされている（Furlong & Cartmel 1997=2009; Ball, Maguire & Macrae 2000）。日本においても、1990年代以降の長期にわたる経済不況は、若者の移行のあり方を大きく変え、新規学卒一括採用による間断のないスムーズな移行が困難になっていると指摘されてきた（乾 2010; 本田 2014 など）。

若者の移行を扱った研究では、移行の不安定化・困難化が若者自身の「未熟さ」といった個人的側面からではなく、学校の送り出し機能の低下や企業の雇用慣行の変化といった社会構造的側面から説明されてきた（小杉編 2002; 溝上・松下編 2014 など）。また、格差・不平等という視角から、移行に対する出身階層の影響が明らかにされ、移行を起点としたライフコースの二極化状況が指摘されている（石田編 2017 など）。これらの研究は、若者の移行が個人の意味では変えられない社会的諸力の影響を受けて多分に水路付けられていること、より多くの困難が一定の層に偏って現出していることを指摘した点で大きな意義がある。

しかし、これらの研究では、不安定な移行をたどらざるを得ない若者の問題が明らかにされる一方で、自ら積極的に不安定な移行を選択する若者の存在は看過されてきた。社会構造や出身階層の影響を強調する先行研究は、不安定な地位に押しとどめられる従属的な存在として若者を捉えており、それゆえ自ら不安定な進路に入り込んでいく主体的側面やそうした選択に至

る背景は未だ明らかにされていない。彼らはなぜ不安定と呼ばれる現代社会において、自ら不安定な進路を選択するのか。この点を明らかにするためには、先行研究とは異なる説明枠組みが必要である。

同様の課題は、「夢追求型フリーター」（日本労働研究機構 2000）に関する研究にもあてはまる。「夢追求型フリーター」とは、自らの夢の実現のためにフリーターを選択する若者を指し、他のフリーターと比べてその選択プロセスには積極性がより看取できる。だが、先行研究では、彼らの出身階層の高さを指摘したり、夢というフリーター選択理由を動機の話彙として解釈したりすることどまっている（山田 2004; 小林 2006 など）¹⁾。つまり、フリーター選択における積極性が最も見だしやすい対象であるにもかかわらず、なぜ夢を追うためにフリーターを選択するのか、またなぜフリーターでなければならないのかという移行過程の積極性について十分に検討がなされていないのである²⁾。

この点、ストリートダンスに興じる若者集団を対象とした新谷 (2002) の研究は重要である。新谷は、これまでの研究が若者個人のフリーター選択プロセスを検討してこなかったという問題意識から、若者が積極的にフリーターを選び取っていく背景を、学業達成、出身階層、文化という視点から多角的に検討する。具体的には、学校や家族から抜け出し、学校外の集団に準拠することでフリーターを選択していること、また、地元の仲間集団の間で場所・時間・金銭を共有することでフリーターとしての生活が可能になり、またそれらを共有するためにフリーターであり続けていることを指摘している。

しかし、新谷の研究には、様々な社会的背景によるフリーター選択プロセスへの影響が検討される一方で、ストリートダンスという若者文化の影響が十分に検討されていないという課題を指摘することができる。この課題は、先述した移行研究全体の課題に通底する。つまり、学業達成や出身階層といった社会的背景に着目した説明が堅持されることで、若者文化という若者の移行に独自の影響を与える他の側面が十分に考察されていないのである。

若者文化が若者の進路に影響を与えることは、繰り返し指摘されてきた。例えば、広田 (2008) は、若者文化への埋没が学業達成からの離反を促し、非正規雇用など不安定な進路を導く危険性を指摘する。しかし、若者文化が若者を不利な進路に水路付けることは示されながらも、それがなぜ連関するのか、つまり、若者文化に関わるいかなるメカニズムが若者をフリーターへと導くのかは明らかにされていない。若者文化とフリーターという進路との連関を理解するためには、まずもって若者をフリーターへと誘う若者文化の内部構造³⁾を明らかにする必要がある。

以上の検討を踏まえ、本稿では、自らの夢を実現するために、積極的にフリーターを選択したバンドマンを対象に⁴⁾、若者文化がフリーター選択・維持プロセスに与える影響を検討する。具体的には、新谷 (2002) の「地元つながり文化」という指摘を参考に、場所・時間・金銭の共有という視点から上記の課題に迫っていく。場所・時間・金銭という要素は、「地元つながり」同様、バンドという集団の活動状況を規定する重要な要素であるため、バンドマンのフリーター選択・維持プロセスを検討する際には有効であると考えられる。

また、この課題を検討するにあたり、本稿では 23～25 歳のプロを志向するバンドマンを対象を限定し、若者文化の影響に焦点化した議論を行っていく。このことは一方で本稿の限界を示すが、他方でこれまで十分に検討されてこなかった若者文化独自の影響を検討可能にする。プロを志向する点で若者文化の内部構造により埋没せざるを得ず、また離学後に一定期間その構造に埋没した経験を有する若者を対象とすることで、若者文化の影響をより鮮明に描出することが可能となる。また、社会的背景に関する説明を混在させてしまうと、若者文化独自の影響について十分な考察ができないため、両者を区分し、若者文化に焦点化した議論を行う必要がある。本稿は、以上のような限界を持ちつつも、若者文化の側面から、バンドマンのフリーター選択・維持プロセスにおける積極性を検討する点で重要な知見を導出できると考える。対象を広げたさらなる検討および社会的背景と組み合わせた考察は今後の課題としたい。

以下では、まず本稿で使用するデータについて述べる (2 節)。続いて、バンドマンのフリーター選択プロセスを検討し (3 節)、フリーターを選択・維持する背景を「場所・時間・金銭の共有」という視点から明らかにする (4 節)。続けて、バンドマンのフリーター選択・維

持プロセスに、バンドという若者文化がいかなる影響を与えているのかを考察し（5 節）、最後に本稿の知見をまとめ、今後の課題を指摘する（6 節）。

2 調査の概要

本稿では、バンドマンを対象に筆者が 2016 年 4 月から継続的に実施している聞き取り調査によって得られたデータを使用する。筆者は、調査を進める中で、バンド A メンバーと出会い、彼らが出演するライブに通うようになった。通常のライブイベントでは、4～6 組程度のバンドが出演するため、筆者は出演バンドの来歴やメンバー構成、各メンバーの年齢などをあらかじめバンドの HP などで確認し、バンドマンの属性を考慮して個別に調査協力を依頼してきた。研究参加者は、必ずしも調査時点でバンドとして活動している者ばかりではないが、少なくともプロのバンドマンを志向して一定期間活動した経験を有する点で共通している。本稿では、その中でもフリーター選択経緯に関する詳細な語りが得られた 7 名を取り上げる（表 1）。

ここで、本稿で使用するデータの特性について述べておきたい。本稿では、バンド A メンバー 4 名の語りを中心に分析していく（バンド A メンバー以外の 3 名の語りは、バンド A メンバーの語りに基づく分析を傍証するために使用する）。その理由は、後述の分析が示すように、バンドマンのフリーター選択には、所属するバンドの他のメンバーの存在が重要な役割を果たしているからである。この影響関係を正確に捉えるためにも、1 つのバンドを積極的に取り上げる必要がある。バンド A は、東海地方の X 県を拠点に活動するバンドで、現在のメンバー体制では約 3 年の活動経歴を持つ。各メンバーはそれぞれ 10 年近くバンド活動に携わっており、X 県では中堅のバンドとして認識されている⁵⁾。なお、バンド A メンバーに関しては、レンとカズマが「地元つながり」の関係性にあるが、バンド A 自体はバンド活動を通じて形成されたつながりである。また、バンド A メンバー以外の 3 名は、バンド A とはライブを通してつながっている。彼らはいずれも調査時点で離学後 1～3 年が経過しており、全員が 23～25 歳であった。

表1: 研究参加者概要

仮名	性別	所属バンド	出生年	最終学歴	就業形態	家族構成(学歴)	居住形態
レン	男性	A	1992	大学中退	フリーター	父(大学中退)／母(高卒)／兄(大卒)	ルームシェア
カズマ	男性		1992	大卒	フリーター	父(高卒)／母(高卒)／妹(大学在学)	実家
ユウキ	男性		1993	大卒	フリーター	父(不明)／母(不明)／姉(短大卒)／姉(専門卒)	実家
ジュン	男性		1991	専門中退(美容系)	フリーター	母(高卒)／妹(大卒)／弟(大学在学)／弟(大学在学)	実家
リョウ	男性	B	1993	専門卒(音楽系)	フリーター	義父(中卒)／母(専門卒)／弟(大学在学)／妹／祖父母	実家
ダイキ	男性	C	1991	大卒	フリーター→正社員	父(高卒)／母(高卒)／妹(大卒)	実家
ミズキ	女性	D	1993	専門卒(音楽系)	フリーター	父(大卒)／母(高卒)	実家

研究参加者の特徴としては、第 1 に、彼らが皆フリーターとしてバンド活動に携わっている（携わっていた）こと、第 2 に、彼らが皆プロのバンドマンを志向していること、第 3 に、彼らの学歴・出身階層が相対的に高いことが指摘できる。第 1 の点に関しては、本稿の目的に適合した研究参加者であることを裏付ける。フリーターから正社員に移行したダイキの語りをあえてデータに加えたのは、正社員として活動する現在から見た過去のフリーター経験の省察を分析に加えるためである。第 2 の点に関しては、先述のとおり、プロを志向する若者を対象にすることで、若者文化の内部構造がより詳細に検討できると考えた。第 3 の点に関しては、夢を追う若者の出身階層の高さが先行研究で指摘されていることを受け、本稿の研究参加者がそれと大きく異なるものではないことを示している。繰り返すが、本稿の目的は、バンドマンのフリーター選択に影響を与える社会構造的側面を検討することにはない。そのため、表にてその概要を示すにとどめるが、今後、彼らがなぜフリーターを選択するのかという問いに合わせ

て、彼らがなぜフリーターを選択できるのかについても検討する必要がある。この点については、本稿の最後に改めて言及する。

ここであらかじめ、バンドマンのフリーター選択に関する語りの特徴を述べておきたい。彼らの語りにおいて特徴的なのは、フリーターに関する語りが一貫していること、語りと行為の乖離が少ないことである。新谷 (2002) は、フリーターになる若者の志向性の移り変わりやすさ、語る内容と実際の行為との非一貫性について指摘している。また、「夢追求型フリーター」が批判されたのは、まさに彼らが夢を語りながらもそれを実際の行動に移していかないためであった。しかし、バンドマンのフリーター選択に関する語りからはこのような傾向は見いだせなかった。彼らはフリーターであることを一貫した論理で語るとともに、フリーターであることを前提にしてバンド活動のスケジュールを作成していた。このことは、後段の分析が示すように、フリーターであることを前提にすることで初めて安定的に夢を追えるからだと考えられる。こうした語りの特徴に留意して分析を進めていく⁶⁾。

次節ではまず、バンドマンがどのようなプロセスを経てフリーターを選択するに至ったのかを確認する。なお、データを引用する際には、筆者の発言を*で示し、分析において重要な語りには下線を付している。

3 なぜフリーターを選択したのか

バンドマンのフリーター選択理由として最も頻繁に語られたのは、バンド活動を「やりたいこと」だとみなすものである。次に引用するのは、就職活動での自己分析を通して、バンド活動が「やりたいこと」だと気づき、フリーターを選択したというカズマの語りである。

*** : どういう経緯でさ、就活してたのにやめたの？**

カズマ : 就活のとき、自分はどういう人生を生きたいかみたいなのをさ、就活のときに考えるじゃん。それを考えたときに、(中略)ノートにめちゃ書いてある。どういふふうになりたいかみたいなの。何が好きかとか。

*** : 自己分析みたいなの？**

カズマ : そうそうそう。普通にそのときに、まあいろいろ思って、バンド一回ちゃんとやらないとって。 (2016/04/09)

*** : 普通に就職したくなかったとかあるの？**

カズマ : いや、そんなことはない。別にバンドでやりたいって気持ちが自分の中になかったら多分普通に就職した。

*** : 普通に働くよりはバンドをやりたいって感じ？**

カズマ : あー、そうだね。それは、なんでだろうね。バンドの方がやってみたい気持ちが強かったから。 (2016/04/09)

これらの語りからは、カズマが就職するという選択を忌避したというよりは、就職する以上の「やりたいこと」を見出したために、フリーターを選択したことが分かる。「バンドの方がやってみたい気持ちが強かったから」というカズマの語りはそのことを明確に示している。

バンド活動を「やりたいこと」として捉える見方は、既存のフリーター研究の知見と一致する。しかし、「やりたいこと」という個人レベルの理由とは別に、バンドマン特有の理由が存在する。それは、バンドという活動形態の集団性が、他のバンドメンバーのフリーター選択に影響を及ぼすという関係論的理由である。

カズマが就職活動を通して獲得した「バンド一回ちゃんとやらない」という認識は、当時一緒に活動していた他のバンドメンバーの進路にも大きな影響を与えた。カズマと長年バンド活動を共にしてきたレンは、自身の大学中退理由を説明する際に、カズマの影響を語った。以下の語りは、レンとカズマが大学生のときに今後のバンド活動の方針について話し合った際のやりとりを示している。彼らにとってこの話し合いは、その後の人生の方向性を大きく決定づ

けたという点で重要な契機として位置付けられる。「バンドを解散するか、まあ就職しても続けられるペースに落とすか」という話し合いの中で、カズマの発言をきっかけに、カズマとレンはフリーターとして夢を追う進路を選ぶ一方で、それ以外のメンバーはバンドを脱退している。

レン：俺も、ちょうど就活するみたいな感じになって、バンドを解散するか、まあ就職しても続けられるペースに落とすかみたいな、どっちかみたいな感じになったんだよ。で、一旦、ペースを落とす方に傾いて。で、俺もぼんやり就職しないとイケないかなみたいな感じになってたときに、カズマが、「俺は嫌だ」みたいな。（中略）「もうやめるか、しっかりやるかどっちかにしたい」みたいなことを、あいつが言ってきたから、それで俺が火ついて、じゃあ大学辞めるって言って（笑）。意思表示みたいな。

*：本気だよっていうことを示すためってこと？

レン：そのとき、他のメンバーが抜けるってことはわかってたんだけど、カズマがそういうなら、まあ本気でやるよ、みたいな。あそこであいつがあ一言なかったら、俺も就職してた可能性もなはないな。 (2016/04/12)

バンドマンのフリーター選択は、一方でバンド活動を「やりたいこと」だとみなす個人的嗜好によってもたらされているが、他方で、バンドという活動形態の集団性を背景としたメンバー間の相互作用によってもたらされる。次に引用するユウキの語りからは、「やりたいこと」を理由としたフリーター選択がバンドの集団性にも大きく規定されていることがわかる。

*：大学生のときは普通に就職するつもりだったの？

ユウキ：僕は、それ難しいんですよ。やりたいことがほんとになくて。ほんとにないっていうか、バンドがほんとにやりたかったんですよ。全然メンバーが見つからない状態で、それでずっと探してたから。僕は別に就職、このままメンバーが見つかなかったら就職するなあ、ぐらいに思って。でも、最初に[レンとカズマに]会ったときは、なんか、「自分たちはフリーターでやってくつもりです」みたいなのをカズマさんに言われて。で、「まだ大学3年生だから、まあどうするかは一緒に組んでから決めていいよ」みたいな話で。そのときは、僕はとりあえず「やってって、活動してから決めます」みたいなことを言ったけど、途中で、入った途中あたりで、もし就職するなら、さっさと抜けないと、なんか、たぶんまた新しいメンバーを探さないといけないじゃないですか。さっさと抜けないと、邪魔になるだけだあって思って。だから就職するかしないかは、わりと早く、もうバンド一本で行こうってのは、入って数か月ぐらいで決めて。 (2016/04/21)

ユウキは、バンドAに加入するまで活動できるバンドを見つけられずにいた。そうした中でようやく加入できたバンドAのメンバーはその当時からフリーターとして活動しており、また今後もフリーターとして活動していくことを明言していた。そのため、彼は他のメンバーに合わせるように自らの進路をフリーターへと水路づけていったのである。

このように、バンドマンたちは進路選択の重要な契機において、バンド活動を「やりたいこと」だと認識し、積極的にフリーターを選択していた。しかし、特に重要なのはその選択が、他のバンドメンバーの存在に大きく規定されていることである。バンドという活動形態の集団性が、独自の影響を及ぼすことで、各メンバーにフリーター選択を促しているのである。

それでは、なぜ彼らはフリーターでなければならないのだろうか。フリーターでなくとも、夢を追う方法は多様に存在するはずである。しかし、多くのバンドマンが積極的にフリーターを選択・維持していることを鑑みれば、その背景にはフリーターでなければならない理由が存在すると考えられる。次節ではこの点を「場所・時間・金銭の共有」という視点から検討する。

4 なぜフリーターでなければならないのか

4.1 夢追いを可能にさせるフリーター選択——場所と時間の共有

バンドマンがフリーターでなければならない背景には、彼らが夢の実現を目指す若者だということが関連している。つまり、夢を実現させるためには、数多くのライブに出演し、人気を獲得する必要がある。その過程で、音楽業界関係者に見出され、音楽事務所などと契約を結ぶことが可能になる。そして、夢の実現に向けた精力的なバンド活動を行うためには、メンバー間で都合を合わせる必要がある。カズマは、正社員で活動するバンドマンについて、「ライブをする日にち」の問題を次のように語った。

*** : 正社員しながらバンドやっとなる人おるやん。そういう人たちのことはどう思うの？**

カズマ : それでちゃんとできればいいんだけど。

*** : フリーター選んだ理由には、なにかあるの？**

カズマ : 正社員だと、絶対中途半端になっちゃうだろうなあって思ったから。

*** : 中途半端って何ができなくなるとか？**

カズマ : ライブもたぶん限られてくる、出来る日にちが、みんなの予定も合わせられない。

とにかくバンドに制限がたくさんできちゃうから。 (2016/04/09)

この語りの正当性は、メンバーの都合が合わない場合にはライブの出演依頼を断らざるを得ないというダイキの語りからも明らかである。ダイキは、大学卒業後しばらくの間はフリーターとして夢を追っていた。しかし、家族との衝突、メンバーの結婚などを経て、現在は正社員として働く傍ら、サポートメンバーとして他のバンドに加わりながら音楽活動を続けている。主に所属するバンドの活動は精力的には行われていない。次の語りは、主として活動するバンドに出演依頼が来たとき、メンバー個々の事情によって都合が合わせられないため、ライブの出演依頼を快諾できない場面があることを示している。バンドマンは、ライブの日程、つまり時間をメンバー間で共有することで精力的な活動を可能にさせているのである。

*** : ダイキさんに声をかけて、ダイキさんのバンドに出演をお願いする感じですか？**

ダイキ : そうだね。例えば、引き受けられなかったら、「ごめん、俺達うバンドやっとなるけど、そっちでもいい？」とか言ったりするけどね。(中略)「ごめん、俺ら活動に制限があるバンドだから。ごめん、折角のお誘いで悪いけど、メンバーができないからその日絶対見に行くわ」ってことはするようにしてる。 (2016/09/29)

また、ライブという時間の共有は、同時にライブハウスという場所の共有を意味する。バンドメンバーと同じ時間に同じ場所でライブをすることこそが、彼らにとってのライブ活動そのものであり、夢の実現に向けた活動に他ならない。つまり、集団で夢を追うバンドマンにとって、メンバー間で場所と時間を共有することは精力的な活動を展開する重要な条件であり、この条件を満たすために、フリーターという一見不安定な進路が積極的に選択・維持されているといえる。それに対し、正社員という働き方は直接的にバンド活動を制限するものとして回避される。彼らは、バンドメンバーの影響によってフリーターを選択するのみならず、バンドという集団で活動するがゆえに、フリーターを積極的に選択・維持していかなければならないのである。

しかし、ここで1つ疑問が残る。新谷が見出した「地元つながり文化」では、金銭の共有は、若者のフリーター維持にとって重要な要素であった。つまり、若者集団内部での金銭の貸し借りが、フリーターであることによって生起する金銭的困難への対処となり、その結果として、フリーターを続けることが可能になっていたのである。バンドマンたちはこの金銭的困難に対してどのように対処しているのだろうか。次項では、フリーター選択に伴って生じる金銭的困

難の実態とその対処方法について検討し、彼らが金銭的困難を負ってなおフリーターを維持できる背景を明らかにする。

4.2 フリーター選択・維持に伴う金銭的困難とその対処方法

まず、バンドマンがいかなる金銭的困難を抱えているのか確認しておこう。音楽専門学校を卒業した後、フリーターとニートの間を揺れ動きながらバンド活動を続けるリョウはバンドマンの金銭的困難について以下のように語った。

リョウ：金取るやつは、めっちゃ売れてるやつから取ればいいのになとかめっちゃ思います。売れてねえやつから取るなよって（笑）。金銭的な問題っていうのは多分どのバンドも抱えていると思います。 (2016/09/12)

また、フリーターから正社員へ移行したダイキも、フリーター時代に直面した問題として真っ先に金銭的困難をあげている。彼らの語りからは、バンドマンにとっての金銭的困難が回避できない重要な問題として認識されていることがわかる。

***：フリーターやってたときに悪かったことっていうのは？**

ダイキ：収入が安定していない。お金の心配はどうしても付きまといながら活動するから。
(中略)フリーターのときはつらかったすね。 (2016/09/29)

それでは、上記のような金銭的困難に対し、バンドマンはどのように対処しているのだろうか。ここで改めて先に引用したリョウの語りに着目したい。リョウはこの語りの冒頭で、「金取るやつは、めっちゃ売れてるやつから取ればいいのになとかめっちゃ思いますもん」と語っている。この語りの指示対象はノルマというシステムによって金銭の支払いを要求するライブハウスである。ノルマとは、ライブハウスによって課されるチケット枚数のことであり、一バンド当たりおよそ10枚から20枚を目途にチケットの販売が義務付けられている。ノルマで指定された枚数を完売できなければ、その差額をバンドマンが支払うことになる。このノルマがバンドマンのバンド活動に伴う金銭的負担を形成している。専門学校中退後、フリーターとしてバンド活動を続けてきたジュンは、所属するバンドの金銭的負担について次のように語った。

***：今って、バンドAは黒字なの？赤字なの？**

ジュン：たぶん赤 [字] だよ。

***：どれぐらいの赤 [字] ？**

ジュン：1回ライブすると、バンドで10000円とかだと思う。

***：4人だと1人2500円ぐらいの負担？**

ジュン：あと打ち上げあるから、だいたい5000円とかだと思う。 (2016/04/16)

この語りで示される「10000円」が、ノルマによってバンドが支払わなければならない金額である。ここで注目したいのが、「4人だと1人2500円ぐらいの負担？」という筆者の問いかけに対し、それを否定することなく1人当たりの具体的な負担金額を提示していることである。つまり、バンド単位で課せられるノルマによって生じた金銭的負担がバンドメンバー内で分割されているのである⁷⁾。ライブハウスにおけるノルマと同様に、バンドの練習場所として使用されるスタジオの料金もメンバー内で分割されている。

***：スタジオっていくらぐらいするの？**

カズマ：1時間部屋料金が2000円ぐらい。だから3時間入ったら6000円ぐらいで、それを4人で割るから1人1500円ぐらい。 (2016/04/09)

バンドマンの金銭的困難を考えると、ノルマやスタジオ使用料金がバンド単位で課せられていることは重要である。なぜなら、それがバンドマン1人当たりの金銭的負担の軽減につながるからである。シンガーソングライターなど個人でまたは少人数で活動する者の場合、この金銭的負担を一手に引き受けなければならない。3人組バンドで活動するミズキの語りからは、バンドメンバー数の相対的な少なさが1人当たりの金銭的負担を増大させていることがわかる。

*** : スタジオってバンド単位でいくら決まってるの？**

ミズキ: まあ、1つの部屋、部屋代としてなんで、それを割るみたいな感じで。なんで人数が多ければ多いほど [1人当たりの金額が] 少ないんですよ。ノルマもそうなんですよ。一バンドいくらで、1人当たり割ったらいくらだなんていうので。まあ、3人なんで1人当たりの分が多くなるんで。 (2016/12/20)

以上の分析からは、フリーターであることによって生起する金銭的困難が、バンドという活動形態の集団性とバンド活動に関連するライブハウスやスタジオの料金システムによって緩和されていることがわかる。バンドという集団で活動するがゆえに、またバンド単位で金銭的負担を課す料金システムが業界構造として存在するために、バンドマン1人当たりの金銭的負担は相対的に軽減されているのである。もちろん、リョウの語りにあるように、負担が軽減されているとは言え、その総量は無視できるものではない。しかし、少人数で活動する他のミュージシャンと比べて相対的に多くの人数で活動するバンドマンは、フリーターであることによって生起する金銭的困難のうち、いくらかを免れることができているのだ。それによって金銭的困難を背負いながらもフリーターを継続することが可能になっていると考えられる⁹⁾。

本節では、バンドマンがフリーターを選択・維持しなければならない背景を探ってきた。その結果、夢を追っていることとフリーターであることが密接に関連しあっていることが分かった。すなわち、夢の実現に向けて精力的にバンド活動を展開するためには、メンバー間で場所と時間を共有しなければならない。さらに、フリーターであることに付随する金銭的困難は、バンド活動に関連するものに限れば、活動形態の集団性と音楽業界の料金システムによって緩和される。フリーターでなければならない理由とフリーターであることによって生じる困難を緩和する構造がともに存在することで、彼らはフリーターを積極的に選択・維持していたのである。

5 フリーター選択・維持プロセスと若者文化の内部構造——積極性と合理性の背景

前節の検討で明らかになったのは、バンドという活動形態の集団性と音楽業界の料金システムがバンドマンの積極的なフリーター選択・維持プロセスに重要な影響を与えていたことである。この2つは、いずれもライブハウスにおけるバンド文化と密接に関連しており、バンドという若者文化の内部構造を構成する要素である。本節では前節の知見を、若者文化の内部構造という観点から考察し、フリーター選択・維持プロセスに関する議論を深めたい。

まず、活動形態の集団性であるが、これはバンドという若者文化の内部構造において最も基本的な前提である。ギター、ベース、ドラム、キーボードといった楽器を各々担当し、集団として活動するバンドマンは、バンドという活動組織を得ることで日々の活動をこなしている(1人で活動する場合には「シンガーソングライター」や「弾き語り」など別の名称が与えられていることから活動形態の集団性はバンド固有のものだといえる)。そしてこの特徴が、夢の実現を目指すための必要条件として場所と時間の共有をバンドマンに求めていた。彼らは、集団で活動するがゆえに、場所と時間を共有する必要がある、その条件を満たすためにフリーターという進路を選択・維持していたのである。

そしてこの集団性は、宮入(2008)がライブハウス文化の1つとして指摘するノルマ制度をはじめ、音楽業界の料金システムとも関連している。バンド単位で料金が設定されている業界構造は、バンドの集団性に依拠することでバンドマン1人当たりの金銭的負担を軽減することにつながっている。つまり、フリーターという状況がもたらす金銭的困難を緩和するのに、バ

ンドの集団性と業界構造が相互連関的に作用していたのである。よって、バンドマンは金銭的困難を抱えながらフリーターを続けることが可能になっていた。

バンドの集団性は、バンドマンに場所と時間の共有を強いることで、フリーターを積極的に選択させていた。それゆえ、彼らはフリーターであることによって生じる金銭的困難にさらされることとなる。しかし、バンドの集団性は、それを前提とする音楽業界の料金システムと組み合わさることで、バンド活動に伴う金銭的困難の緩和にも結び付いていた。つまり、活動の形態の集団性と、それに基づく料金システムがバンドという若者文化の内部構造に内包されているために、金銭的困難を背負ってなお、場所と時間を共有することが可能になり、それゆえ、フリーターという一見不安定な進路が積極的に選択・維持されていると考えられる。そして、プロのバンドマンを志向する彼らにとって、これらの構造に適応することは回避できない。つまり、フリーターという進路は、ほとんど選択の余地がないままに選ばれているのである。バンド活動における場所と時間の共有性の高さ、金銭的負担の低さ（「シンガーソングライター」など1人で活動する場合は逆となる）を可能たらしめる構造が存在することによって、積極的なフリーター選択・維持プロセスが現出していると考えられる。

6 結語

本稿では、バンドマンを事例に、夢を追う若者が積極的にフリーターを選択・維持するプロセスとその背景を若者文化の内部構造という観点から検討してきた。知見は次の3点である。

第1に、バンドマンはバンド活動を「やりたいこと」だと見なしながら、それと同時にバンドメンバー同士の相互作用の中でフリーターを選択していた（3節）。バンドという活動形態の持つ独自の力学が、バンドマンのフリーター選択を促していたのである。第2に、バンドマンはライブ出演に向けてメンバー間で場所と時間を共有する必要があることからフリーターを選択・維持していた（4節1項）。フリーターでなければ、メンバー間で場所と時間を共有することができず、夢の実現に向けた精力的な活動を展開できないという構造が、バンドマンのフリーター選択・維持の背景となっていた。第3に、フリーターであることによって生起する金銭的困難が、バンドという活動形態の集団性とバンド単位で支払いを求める音楽業界の料金システムによって緩和されていた（4節2項）。これらの知見をもとに、バンドという若者文化の内部構造とフリーター選択・維持プロセスとの関係を考察した（5節）。

本稿の知見から導き出せるインプリケーションとして、まず第1に指摘すべきは、若者の夢追いを動機の語彙として解釈することの限界である。先述の通り、これまでの研究は、進路選択における夢追いという理由を、自己正当化を可能にさせる動機の語彙として論じてきた。しかし、本稿の分析からは、夢追いという理由が自己正当化の手段ではなく自らの人生を形作る具体的な指針として位置付けられていることがわかる。彼らは学校から職業への移行というライフコースの重要な契機において、夢を指針にフリーターを選択していたのである。この知見は、夢追いを動機の語彙として捉える傾向にあった先行研究に対して、積極的に提示しておくべきだろう。

第2に、フリーター選択・維持プロセスを若者文化の側面から検討する必要性と意義である。本稿では、先行研究とは異なり、社会構造的側面からではなく、若者文化の側面からフリーター選択・維持プロセスを検討してきた。この点について、説明が一面的だとする批判もありうるだろう。しかし、本稿で強調したいのは、ときに社会構造以上の影響力を持つ若者文化の内部構造の実態である。2節でも述べたように、本稿の研究参加者たちは相対的に出身階層が高かった。先行研究ではこの事実を、夢を追うことを可能にする豊かな社会的背景として捉えてきた。また、新谷（2002）を含め、従来の若者文化研究においては、学校文化に適応できない／しないことが学校外の若者文化に没入していく契機だと論じてきた。しかし、本稿の分析から見いだせるのは、たとえ相対的に高い社会階層の出身者であっても、また学校文化に親和的な者であっても、夢を追求するためには適応しなければならない構造が存在するという事実である。若者文化の内部構造は、いかなる社会的背景および学校経験を持つ者であっても、半ば

強制的にフリーターになることを要求するのである。こうした独自の影響を持つ若者文化について詳細な検討を行った意義は大きいと考える。

第3に、本稿の知見は、先行研究とは異なる政策的示唆を提示する。先行研究では、職業意識の涵養やフリーターから正社員への移行の促進などが必要な方策として指摘されてきた。しかし、フリーターでなければ夢が追えないという状況を踏まえれば、むしろ必要なのは、夢と両立できる働き方を整備したり、夢を諦めた後のセカンドキャリアへの移行を円滑に行えるようにしたりするなど、夢を追う若者の取りうる選択肢を増やし、多様な形で自らの人生を組み立てることができる、またそれを支えることができる社会制度を構築していくことではないか。フリーターであることを一方的に批判するのでも推奨するのでもなく、また、正社員になることを無批判に促進にするのでもない方法で、若者支援政策を充実させていく必要がある。

インプリケーションを指摘したうえで、それと関連付けて本稿の課題を2点述べておきたい。

まず、若者文化の内部構造に焦点を当てる本稿の議論は、先述のような意義を持つ反面、社会構造や学校経験といった他の要素を検討できていない点でやはり課題がある。今後、バンドマンの社会的背景を広く検討し、本稿の議論と組み合わせることで考察することが求められる。

次に、より重要な課題として、バンドマンのフリーター選択・維持プロセスをより長期的視野で検討する必要がある。本稿では、主にフリーターを選択する段階に目を向け、若者文化との関連から説明を行ってきたが、より長期的に見れば、彼らの多くがフリーターを離脱し、夢を諦めている現実にも目を向けなければならない。フリーターからの離脱は、フリーターであることを求める若者文化の内部構造との間にいかなる軋轢を生じさせ、当の若者にどのような困難を与えるのか、バンドマンのフリーター離脱プロセスを含め、若者文化の内部構造の影響をより長期的に検討する必要がある。

[注]

- 1) 夢を動機の語彙として解釈する研究には、例えば、「『夢』に向かう具体的な活動や努力が欠け、『夢を持つ』という生き方が好ましいから『夢』を語っているにすぎない、ファッションとしての『夢追い』である者も見られる」と指摘する小杉 (2003: 100) が代表的である。
- 2) この点、本田 (2004: 98) の「特殊労働市場」に関する議論は参考になる。本田は、音楽関係や演劇関係といった「夢追求型フリーター」が目指す職業の中に、フリーターという就業形態でしか参入できないものが存在することを指摘し、そうした特別な労働市場の影響を「特殊労働市場要因」と呼んでいる。しかし、そうした特別な労働市場がなぜフリーターであることを要求するのかという労働市場の具体的な内実については検討されていない。本稿では、この点を若者文化の内部構造という観点から迫り、なぜ夢を追うためにフリーターでなければならないのかを明らかにする。
- 3) 本稿でいう「若者文化の内部構造」は、当該の若者文化に係る活動を成り立たせ、かつそれに影響を与える社会経済・文化的要素から構成される。具体的には、当該文化の生産・流通を担う業界システムや活動形態を特徴づける文化的側面などである。本稿では、バンドを事例に音楽業界の料金システムと活動形態の特殊性に焦点を当ててフリーター選択・維持プロセスを検討するが、言うまでもなく若者文化の内部構造を構成する要素には、これ以外の要素も考えられる (例えば、フリーターであることを当然視する規範意識など)。またそれは、対象となる若者文化によっても大きく異なっている。そのため、フリーター選択・維持プロセスと若者文化の内部構造との関連の仕方は、どの若者文化を対象とするかによって様相を異にするだろう。事例を変えた研究の蓄積と知見の比較検討が今後求められる。
- 4) バンドマンという事例は、その多くが自らの夢を追求するためにフリーター等の不安定な移行を選択している点で本稿の目的に合致しており、また、先行研究において、若者が掲げる夢の1つとして繰り返し指摘されてきたことから (日本労働研究機構 2000; 荒川 2009 など)、夢を追う若者の事例として妥当である。
- 5) バンド間の序列を推し量る基準に関しては、本稿の目的を大きく超えるため詳述しないが、バンドAの出演するライブイベントにおいて、年齢・経験年数ともに彼らより下のバンドが多く存在すること、レンに至っては、そうした後輩バンドから助言を求められる立場にあること、その一方で、彼らよりも年上かつ経験年数も多いバンドが少なからず存在し、そうした先輩バンドには積極的に助言を求めていることなどから、中堅であると判断した。
- 6) フリーター選択に関する語りが一定である一方で、夢の追求に関わる語り (例えば、今後のバンド活動の方針や夢の実現に関する見通しなど) には揺れが見られた。これは、彼らがフリーターであることを前提にして、夢追いに関する語りを状況に応じて変化させながら紡ぎだしているためだと考えられる。この2種類の語りの関係性については本稿の目的とは異なるため、別稿で検討したい。

- 7) ジュンの所属するバンド A は、月に平均して 3~4 回のライブを行っているため、1 人当たり 1 回のライブで 2500 円の赤字だとすると、ライブ出演にかかる出費は単純計算で月に 10000 円程度となる。もちろん、これ以外に楽器のメンテナンス費や移動費などが加わるため、それ以上の出費が見込まれるが、ライブ出演にかかる 1 人当たりの出費が抑えられていることに変わりはない。
- 8) 本稿では若者文化の側面に着目しているため、ここでの金銭的困難に関する議論は、バンド活動に付随するものに限定したが、彼らの生活全体における金銭状況を捉える際には、家族からの支援状況などを踏まえる必要がある。例えば、本稿の研究参加者がみな実家暮らしであることは、金銭的困難の総体を検討する際には重要な要素となろう。

〔文献〕

- 荒川葉, 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪——高校改革の社会学』東信堂。
- 新谷周平, 2002, 「ストリートダンスからフリーターへ——進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』71: 151-170。
- Ball, S, J., Maguire, M., & Macrae, S., 2000, *Choice, Pathways and Transitions Post-16: New Youth, New Economies in the Global City*, RoutledgeFalmer.
- Furlong, A., & Cartmel, F., 1997, *Young People and Social Change, Second edition*, Open University Press (=2009, 乾彰夫・西村貴之・平塚眞樹・丸井妙子訳, 『若者と社会変容——リスク社会を生きる』大月書店)。
- 広田照幸, 2008, 「若者文化をどうみるか」広田照幸編『若者文化をどうみるか?——日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する』アドバンテージサーバー, 4-30。
- 本田由紀, 2004, 「トランジションという観点から見たフリーター」『社会科学研究』55(2): 79-111。
- , 2014, 『社会を結びなおす——教育・仕事・家族の連携へ』岩波書店。
- 乾彰夫, 2010, 『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち——個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店。
- 石田浩編, 2017, 『格差の連鎖と若者 第 1 巻 教育とキャリア』勁草書房。
- 小林大祐, 2006, 「フリーターの労働条件と生活——フリーターは生活に不満を感じているのか」太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社, 97-120。
- 小杉礼子, 2003, 『フリーターという生き方』勁草書房。
- 小杉礼子編, 2002, 『自由の代償/フリーター——現代若者の就業意識と行動』労働政策研究・研修機構。
- 溝上慎一・松下佳代編, 2014, 『高校・大学から仕事へのトランジション——変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版。
- 宮入恭平, 2008, 『ライブハウス文化論』青弓社。
- 日本労働研究機構, 2000, 『調査研究報告書 No.136 フリーターの意識と実態——97 人のヒアリング結果より』日本労働研究機構。
- 山田昌弘, 2004, 『希望格差社会——「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房。